

呉橋

寄藻川に掛かっており宇佐神宮境内への西からの入口となっている、両端に門がある屋根付きの桁橋は呉橋と呼ばれています。この儀式的な橋は伝統的に、10年に1度しか使用されていません。それは、天皇から派遣された勅使という使者が、宇佐神宮の神々に正式な祈りを捧げるため巡礼をする際に橋を渡る時です。この特別な儀式の期間でない時は、勅使街道に沿って宇佐神宮へ向かう訪問者は、近くの歩行者用の橋を使います。

橋の長さは約24.7メートル、幅は3.5メートルで、呉橋の唐破風（尖った切妻）の屋根はヒノキの樹皮の板葺きで覆われ、その橋体は神社の建物や鳥居によく使われる独特の朱色で塗られています。このような屋根付きの橋はアジア大陸でより一般的で、呉橋は日本で非常に数少ない例の1つです。地元の伝説によれば、宇佐神宮が設立される数世紀前に呉は崩壊したにもかかわらず、中国東部の「呉」という王国出身の大工によって最初に建設されたと言われています。この伝説は、「呉橋」という名前の解釈によって生じた可能性があります。かつて「クレ」は、橋を建てるために使われていた木材を表す漢字で書かれていました。しかし、「クレ」は、「呉」の文字を使って書くこともできます。歴史のある時点で後者の文字が一般的になり、現在では「呉」と「橋」の文字を使った「呉橋」の表記が正式な名前として使用されています。

呉橋がいつ最初に建設されたかは不明ですが、歴史的資料によると、鎌倉時代（1185～1333）には呉橋がすでに存在していました。現在の橋は、1622年に近くの小倉藩の領主であった細川忠利（1586-1641）によって建設されました。欄干にある「擬宝珠」という飾りのいくつかに彼の名前が刻まれています。1876年に修復が行われ、その後、1937年に宇佐神宮で行われた昭和の大改修（1932-1941）の一環として再び修復が行われました。1951年に川の堤防が補強されたときに、橋の西側に延長部分が追加されました。呉橋は大分県の有形文化財に指定されています。